

● 木下 実紀 特定助教

Miki KINOSHITA (Assistant Professor)

研究課題：イラン人ディアスポラによる文学の体系的研究

(Systematic study of literature by the Iranian diaspora)

専門分野：ペルシア文学、イラン地域研究 (Persian Literature, Iranian Studies)

受入先部局：文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名：大阪大学人文学研究科 (Graduate School of Humanities, Osaka University)



イランは、20世紀後半以降の政治的不遇によって欧米諸国との対立ばかりに注目が集まり、その歴史的・文化的重層性に目を向けられる機会は多くありません。しかし、イランの公用語であるペルシア語は長い歴史を持ち、イランの人々は「詩の民」としてペルシア文学を誇っています。私は、このような背景を持つペルシア文学が西欧文学と出会い、現代文学を開花させるに至った「翻訳」や「翻案」という営為に注目し、主に19世紀末から20世紀初頭にかけての作品を分析してきました。この時代は、海外との往来が盛んになった時代であったため、厳しい検閲がなされていた国内を離れ自由な創作活動の場を求めた知識人や文人が多く存在しました。イラン現代文学は、このようにイラン国外に拠点を置いた/置いている知識人や作家によって支えられている側面があり、現代では移民2世以降の作家も登場し、新たな展開を見せています。私はこのような状況に着目し、19世紀末から今日にかけてのイラン人ディアスポラによる文学の様相を体系的に捉えることを目指しています。

Because of its political misfortune since the late 20th century, Iran tends to be focused attention on its conflicts with Western countries; not much attention has been paid to its rich history and culture. However, Persian, the official language of Iran, has a long history and the Iranian people are proud of their Persian literature as 'children of poetry'. I have analyzed literary works from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century, focusing on the activities of 'translation' and 'adaptation'. Translation and adaptation played an important role in Persian literature because it led to encounter Western literature, and as a result, Persian literature blossomed into modern literature. In this era, Iranian intellectuals and writers became able to go abroad so they left their homeland to avoid the strict censorship and sought freedom of speech. This situation is continuing in the present day, thus contemporary Iranian literature is supported by intellectuals and writers who are/were based outside Iran. Nowadays, Iranian writers from the second generation of immigrants and onwards have emerged and are showing new developments in contemporary literature. I aim to systematically capture aspects of literature by the Iranian diaspora from the end of the 19th century to the present day.

ペルシア文学研究

ペルシア文学研究は、宮廷を中心に10～15世紀にかけて発展し黄金期を築いた古典詩研究が盛んである。イラン国内ではフェルドウスイー、サアディー、ハーフェズ、ルーミー、そして日本国内で最も知名度のあるオマル・ハイヤームといった古典詩人の研究の層が非常に厚い。翻って、19世紀以降の近現代文学は今日の言語文化を形成しているにもかかわらず、周縁に置かれてきた研究分野である。ペルシア文学は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて西欧文学作品の翻訳や翻案を通して近代化/西欧化が果たされ、重要な転換期

を迎えた。1921年のモハンマド・アリー・ジャマールザーデ (1892-1997) の『昔々』Yekī būd yekī nabūd が現代文学の嚆矢とされ、続くサーデグ・ヘダーヤト (1903-1951) が現代文学の確立者として知られる。しかしながら、19世紀末から翻訳や文学の担い手となった知識人に加え、上記の現代文学黎明期の作家らは、いずれも祖国イランを離れ移住者 (Mohājer) として国外で創作活動を行っていた。国外で活動した人々が現代文学の祖あるいは確立者として知られているということは他地域の文学と比較すると特異な状況であろう。

表1：イランの政治・社会と文学の状況（作成：木下実紀）

年	イランの政治・社会	文学の状況
1890-1920	イラン立憲革命	立憲革命文学
1920s	バフラヴィー王の独裁	現代文学の黎明
1940-1950	バフラヴィー2世即位 石油国有化運動	検閲体制の弛緩、 「文学の春」
1960s	白色革命期 (強硬な西欧化政策)	イラン共産党への言論弾圧
1979-	イラン＝イスラーム革命	言論弾圧、ディアスポラ急増
2010-	選挙不正への抗議「緑の運動」	移民2-3世の作品

文学と国境

文学研究は、一国一文学の領域で捉えられることが大半であり、ペルシア文学／イラン文学もまた例外ではない。しかしながら、人の移住が珍しいものでなくなった今日の世界では、文学の厳密な境界を定めることは困難になりつつある。19世紀以降、海外との往来が盛んになると、イラン国内での厳しい検閲体制を逃れるため、作家は国外で活動してきた傾向がある。言論の自由が比較的保障された「文学の春」と呼ばれる時代は、大戦後の1940～1950年代のみであった。その後、特に1979年のイラン＝イスラーム革命を機に多くの知識人や作家が国外へ流出し、現在では移民2世以降の世代による非ペルシア語による作品も執筆され始め、文壇における存在感を増している。ペルシア文学界を牽引してきた作家はいずれも祖国を離れ、移住者や亡命者として創作活動を行ってきたことは他地域と比べ特異な状況であろう。しかし、研究史において彼らの作品が国外で書かれたという側面はこれまでさほど注目されていない。また、祖国を離れたことに対する姿勢は作家によって多種多様である。

祖国を離れたことに対する姿勢

1979年の革命後には、単なる移住者（Mohājer）や亡命者（Panāhande）という語が使われるのみならず、根無草や放浪者を意味し、祖国を離れたことをロマン化した「アーヴァーレ（Āvāreh）」が祖国を追われた者に使用されるようになった（Saedi 1994）。一方で、語義としては「アーヴァーレ」と同義であるものの、根無草たることを積極的に捉え、現実の／想像上の「祖国」の変革へ積極的に関与し、自発的で前向きな態度をとる「ゴルバティー（Ghorbatī）」という語も用いられるようになった（Milani 2004; 椿原 2018）。彼らの中

には、ペルシア語と現地語双方で執筆する作家も複数存在する。このように、イラン人ディアスポラの中でもその様態はさまざまである。

変遷するペルシア文学／イラン文学

上記の状況に鑑みて、本研究ではおよそ130年にわたるイラン人ディアスポラの実態把握に努め、ペルシア文学／イラン文学の変遷の再考を試みる。なお、これまでディアスポラ文学の文脈で主たる研究対象となってきたのは、1979年の革命後の作品であるが、実際にはそれよりも早期にディアスポラ作家は存在したため、本研究では19世紀末から1979年の革命前までに国外で活動した作家も分析対象として取り上げる。また、2010年代以降に活躍している移民2世以降の作家は非ペルシア語で執筆するため、ペルシア文学の文脈からは捨象されているものの、彼らのアイデンティティはイランのルーツにも根ざしていることが作品中から散見される。これらの作品をペルシア文学の観点から分析するのみならず、英文学等の他言語による文学研究とも融合あるいは連携し研究を進める。本研究では、これまで一国一文学の領域で捉えられていたペルシア文学／イラン文学を、このような言語横断的研究によって新たに捉え直すことを企図している。



図1：イラン・ニーシャープールのオマル・ハイヤーム廟
(撮影：木下実紀)

参考文献

- 椿原敦子. 2018. 『グローバル都市を生きる人々——イラン人ディアスポラの民族誌』 春風社.
- Milani, Abbas. 2004. "The Purgatory of Exile: Persian Intellectuals in America", *The Lost Wisdom: Rethinking Modernity in Iran*. Washington DC: Mage, 155-170.
- Saedi, Gholamhossein. 1994. "The Metamorphosis and Emancipation of the Avareh". *Journal of Refugee Studies* (7), 411-417.